

# 社会調査叙説：影操りの世界定め

本論に先立って、表題の後半「影操りの世界定め」に簡単な説明を加えておいた方がわかりやすいだろう。

「影操りの世界定め」の内、「世界定め」がおそらく最も耳慣れないものだろうが、これはもともと歌舞伎の用語である。歌舞伎では、顔見世興行や春興行において、どのような時代背景、人物設定をもち、どのような事件などを扱った作品を演じ示すかを、予め、既に観客に受け入れられ「当たり」をとった前例などを手本に、劇場主（太夫元）や脚本家（立作者）が打ち合わせをする。この打ち合わせを通じて、ある年のある興行ではおおよそこんな芝居を披露すると決めることを、「世界定め」と呼ぶのである。

（木下康二『歌舞伎の話』、講談社学術文庫、2005、153-154 頁）筆者は、その「世界定め」に社会調査をなぞらえることが、等身大の社会調査を理解するにあたって、適切だと考えている。

では、「世界定め」になぜ「影操りの」と条件が付くのか。

それを説明するには、「影」が、一般に言えばデータに対応するものであることから始めなければならない。

言うまでもなく、データは、およそ社会調査について論じようとするならば、その基幹と目されて相違ない。つまり、社会調査とはデータをえようとする活動のことであり、データとして記録する活動であり、データを分析する活動である。そうした活動をどのように実現するかについての実用的な手続きを整理したものが、いわゆる社会調査法やデータ分析（技法）と呼ばれるものである。

しかし、dataの単数形 datum がもともと「与えられたもの」を意味するにせよ、社会調査を論じるにあたって、データが既にある形で手元にあることから口火を切るならば、明らかに拙速であり、なにかを素通りしている。

なにか？

それが、データと呼ばれる前にとっている様々な姿を想像してほしい。生身の1人の人間の人生かもしれない、大きな災いの後絞り出すように放たれた幾言かもしれない。とおりいっぺんにみえるが、文殊の知恵を集め平明さをめざした家電マニュアルかもしれない、入り組んだビジネスや政治の場での、あちこちへの含意をはらんで折り畳まれ綾なすつぶやきかもしれない。

やや抽象的に言えば、「どんな一点も他のどんな一点とでも接合される」地下茎（リゾーム）（ドゥルーズ+ガタリ『千のプラトール：資本主義と分裂症（上）』、河出文庫、2010、23頁）を思い浮かべてもらおうとよい。

また、才能ある文学者の次のイメージ描写にも近いかもしれない。

「無数の光点を無造作に連絡して編み上げられた円柱が、床面と天井を繋いでいる。赤く光る点のそれぞれはてんで勝手なりズムで脈動して、見守るうちに連絡は絶たれ、手を伸ばして新設されて新たな光点を生み出していく」(円城塔『Self-Reference ENGINE』、2010、ハヤカワ文庫、168頁)

「世界定め」について急ぎ紹介した今の段階では、そうしたなにかを、そのほとんどがヒトの言動からなる社会調査の対象、と、なんとも素っ気なく呼んでおくほかないが、ここで抑えておきたいのは、データは、あくまでそうした社会調査の対象をなんらか写し取ったものであって、しかもそれはせいぜいデータをえようとする者がある仕方(が、見える形になっている、つまり可視化されているとも言い切れない場合を含む)で対象に当てた光に照らされての「影」程度のものにすぎない、と筆者が考えていることである。

要すれば、社会調査の対象は、多くの場合、「影」よりもずっと複雑で精妙な構造や特徴をもっていると用心しておいて、それを全き写し取れるなどと気負い込まない方がまちがいの少ないはずだと言いたいのである。

ひるがえって、仮にあまりに解釈しやすいデータがえられることとそれが「影」であることの失念とはしばしば引き換えであり、エッシャー描くところの「無限階段」を昇り降りするがごとく、「こんなにはっきりした、わかりやすいデータや分析結果」の強調反復と稚拙な戦略やら政策やらとの堂々巡り、枚挙に暇がない。

とにかく、そのほとんどがヒトの言動からなる社会調査の対象からすれば、データとは、そういういわば儚く危なっかしいものであると抑えておくことから始めたいがために、それをわざわざ「影」と呼ぶことにする。因みに、また文学者の助けを借りるなら、次の捨て科白、同感である。

「姉がどんな人間だったかわかった？わかるはずないでしょう。データを並べて人物紹介をしたら「死んだ女」<sup>ひと</sup>のことがわかるなんて。ばかな幻想。」（古川日出男『ゴッドスター』、新潮文庫、2011、7頁）

さて、社会調査とはデータをえようとする活動のことであり、データとして記録する活動であり、データを分析する活動である、と既述しておいた。そのデータを「影」呼ばわりすることにしたのだから、書き換えなければならない。

社会調査とは「影」をえようとする活動のことであり、「影」として記録する活動であり、「影」を分析する活動である。

冴えない話だと思ってくれてかまわない。大したことはできそうにない。そういうものだと筆者は考えている。

もっとも、ということは、と最初からここまでつなげてみて、どうも胡散臭いと感じられる向きもおありになるだろう。

なぜなら、

ということは、社会調査は、その「影」を操っての「世界定め」になぞらえられることになる、

からである。

だが、胡散臭いと感じる際、知らぬ間になにを基準にしているか、ふりかえてみてほしい。

胡散臭くない、インチキでない、嘘でない。それは例えば、事実だとか、客観的だとか、本物だとか、RCT（Randomized Controlled Trials、無作為比較試験。実験科学の標準手続き。これに準じれば「社会調査のウソ」を脱せるかの如き主張もゴマンとあったやに記憶する。後述）だとか、マスターナラティブでは捉えきれないライフヒストリーだとか（「マスターナラティブを成すのは有力者」⇒本当の歴史ヨマスターナラティブ⇒{本当の歴史-マスターナラティブ}ヨライフヒストリー、とこの段階では単純化しておく。後述）、いづれにせよ、ちゃんとしているといった辺りを指すのだろう。

であれば、その決め方如何によっては、およそ社会調査なるもの「影操りの世界定め」がせいぜいのところかもしれないとの拙論に分がある。

胡散臭いと感じる、そして／あるいは、知らぬ間にちゃんとしているを当てにする、くらいなら、社会調査になにがどこまで可能かを冷静に整理する、つまり等身大の社会調査とはなにかをはっきりさせたい、というのが筆者のスタンスである。

理想憲法、そして／あるいは、米軍傘下（または、トランジスタメガホン、そして／あるいは、エシュロン）くらいなら、残されているのはミリオタ。中学生のとき安田講堂「落城」TV 視聴以来の、テキトーな冷め具合。別に、スタンスと言うほどでもないか。

## 序 宙ぶらりんの<sup>リアル</sup>現実

さて、ちゃんとしている、とどうやって決めるのか。

まずは、直感的な素材を使う。図表1は、1937年2月、アメリカ格差社会を写したとされる、マーガレット・バーク・ホワイトの「パンを求めて並ぶルイスビルの人々 (Louisville breadline)」である。

図表1



(*Life*, Oct., 1936, pp.88-89)

これは、貧富+人種格差社会を捉えたフォト・ジャーナリズムの「エンブレム」(Life, Oct., 1996, pp.88-89) と評されつつ、構図の域を越えてヤラセではないかと批判されてもきた一葉である。つまり、

ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い写真

とみなされてきているのである。

仮に 70 年余を経た今もそうみなしうとする。なぜか。いくつか眼の付けどころを挙げることができよう。

・写真の上半分の<sup>ビルボード</sup>大看板、「世界最高の生活水準」とにこやかにドライブを楽しんでいる富裕層と思しきツヤツヤの一家と、写真の下半分、大看板の前に並ぶ、消沈した表情の貧困層で、大看板の一家とは人種も異なると思しき人々すなわち *headline* とのコントラスト (／並ばせたのでは?)

・*headline* の並び順が、ア) 右は同じような帽子を被り厚手のコートのポケットに手を入れた男性 3 人で視線はバラバラ、イ) 中央は男女入り混じってしかもなにか持ち物 (袋、籠、バケツ) を持っている数人で視線は皆右向き、ウ) 左は皆カメラ目線で、ア) とイ) ととも年恰好異なると思しき眼鏡の男と子供 (／並ばせたのでは?)

・ア) とイ) の間に 1 人、カメラ目線の女性、イ) とウ) の間に 1 人、カメラに後頭部を向けた男性 (／並ばせたのでは?)

・白黒写真のせいもあるのだろうが、中央の人々の持ち物がとってつけ

たようにピカピカ（／撮影小道具？）

・大看板の一家は、犬を含め皆首周りが暖かそうなのに、breadline のほとんども寒そうな戸外にも関わらず首周りが空いている（／スタイリスト付き？）

このように、コントラスト、並び順、持ち物、視線、対称性などを眼の付けどころにすると、「絵に描いたようにわかりやすい (cliché)」貧富＋人種格差社会を捉えた一葉とみなしうることになる。(Life, ibid.)

因みに、1937 年はちょうど、リンドが 2 度目の『ミドルタウン』（インディアナ州マンシー）調査を発表した年に当たる。リンドは、その 1 章分を、後にコミュニティ権力構造論 (CPS) で有名になった、労務管理側の「ビジネス・クラス」上層、地元産業主「X 家」の形成に割いている。大恐慌の影なお長かりし時代であり、またニューディールですら「アメリカ的」かどうか (図表 1 大看板の中の筆記体英文はまさにそこを突いている) をめぐって「政治」が語られた季節だったのかもしれない。(後藤隆「ロバート・リンドのミドルタウン調査」、濱谷正晴他編著『社会調査—歴史と視点』、ミネルヴァ書房、絶版)

そうした中、Louisville が、インディアンにとっての「平原」「大地」を意味する中東部の大きな州の中の大きな町だとしても、図表 1 のような光景があっておかしくはない。(／としても、あれほど「絵に描いたようにわかりやすい」一瞬がカメラマンの前に出現するものだろうか?)

話を元に戻そう。いや、そうした歴史的な背景も眼の付けどころに含め

てかまわない。

問いを書き換えよう。

なぜ、コントラスト、並び順、持ち物、視線、対称性、歴史的な背景などを眼の付けどころにすると、

ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い写真

とみなしうるのか。

問いを書き換えたばかりだが、答えを書かなければならない。

その答えとは、昔から多くのヒトたちがそうしてきたから、である。「答え」とは釣り合わない拍子抜け。しかし、至仕方ない。

代表選手を紹介する。

アリストテレスは、自分の講義の出席者に「立言」するに、「実体」「量」「質」「関係」「場所」「時」「状態」「所有」「能動」「所動」の10の眼の付けどころがあると整理した。（『範疇論』、堀田彰『アリストテレス』（人と思想6）、清水書院、1993、57-58頁）カントは、同様の場合（ヒトの「悟性」が働く場合）には、「分量」「性質」「関係」「様態」の4つの眼の付けどころがあると指摘した。（『純粹理性批判』）竹田の解説を引照する。

「悟性のアприオリな形式性は、「分量」「性質」「関係」「様態」（中略）である。人間はどんな対象をも、必ずこの「まとめあげ」の形式性に従って総合し、概念的な判断として認識している。すなわち、たとえ

ば「これは、いま、机の上に存在する、一個の、赤い、リンゴである」、  
といった具合に」(竹田青嗣『完全読解カント『純粹理性批判』』、講談  
社選書メチエ、2010、81頁)

術学に持ち込むつもりはない。昔から多くのヒトたちがそうしてきた、  
と言うとき、哲学者はそうした「ヒトたち」のある極であり、別の極には、  
例えば失語症患者がいる。

「GOさんにはもうひとつよく理解できない症状がありました。(中略)  
わからない語は屋内構造物の名前(壁とか床など)、家具の名前(椅子  
とか机など)、および身体部位をさす名前(膝とか脛など)に限られて  
います。ある特定の意味グループに障害が限られているのです」(山鳥  
重『言語と脳と心：失語症とは何か』、講談社現代新書、2011、37頁)

「特定の意味グループ」、すなわち「眼の付けどころ」であり「範疇」で  
あり「まとめあげ」であり、が「わからない」ということは、失語症の一  
種、つまりコトバを失う病気なのだ。とすると、先の問いをこう書き換える  
こともできる。

なぜ、コントラスト、並び順、持ち物、視線、対称性、歴史的な背景、  
実体、量、質、関係、場所、時、状態、所有、能動、所動などをコトバに  
する(しえない)と、

ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い写真

とみなしうる（えない）のか。

答えも書き換えられる。

それは、哲学者から失語症患者まで、昔から多くのヒトたちがそうしてきたから、である。

問いと答えをセットにし、ここまででなにがわかったかを確かめておく。

…、…、などなどをコトバにする（しえない）と、ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い写真とみなしうる（えない）のは、昔から多くのヒトたちがそうしてきたから、である

あらためて、ホワイトの写真は「直感的な素材」だったこと、そして社会調査の対象のほとんどがヒトの言動であることを併せ想起し、上記「写真」を、なんらかヒトの言動を表す「文章」、「絵」、それらの組み合わせ、等々、すなわち「…」と入れ替えてもよいとすると、結局ここまでで次のことがわかったことになる。

…、…、などなどをコトバにする（しえない）と、ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い「…」、「…」、などなどとみなしうる（えない）のは、昔から多くのヒトたちがそうしてきたから、である

なお、「昔から多くのヒトたちがそうしてきた」を、民主主義、ポピュリズム、オストラシズム（陶片追放）の線にとらえないよう、注意してほしい。つまり、ここで、ヒトの数や集まりの挙動は後回し、である。「クイズ 100 人に聞きました」で何人がスイッチを押したか、がここでの焦点ではない。ここでの焦点は、そうした挙動に先立つ、ヒトという生き物の限界にある。（当然、そういうヒトが集まればその多くはスイッチを押しやすいことになるが。）その意味で、「昔から多くのヒトたちがそうしてきた」を正確に書き直せば、「昔から多くのヒトたちに、ヒトであればそうするほかない、とわかっていた」となる。つまり、ここまでで、

…、…、などなどをコトバにする（しえない）と、ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い「…」、「…」、などなどとみなしうる（えない）のは、昔から多くのヒトたちに、ヒトであればそうするほかない、とわかっていたから、である、

ということになる。

論理的に対偶をとろう。

昔から多くのヒトたちに、ヒトであれば、…、…、などなどをコトバにする（しえない）と、ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い「…」、「…」、などなどとみなしうる（えない）、とわかってい

なかったとすれば、…、…、などなどをコトバにする（しえない）と、ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い「…」、「…」、などなどともみなしうる（えない）かどうかすら、わからなくなってしまう

要すれば、ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い、の拠り所は、ヒトのコトバなのである。世界中で読み継がれてきた本の中にも、同じような記述があったはずだ。

「コトバははじめに神とともに在り、万のものコトバによって成り、成りたるものにひとつとしてコトバによらず成りたるはなし」(聖書ヨハネ伝)

少しだけ寄り道をしよう。

「ヨハネ伝」にもあるようにコトバが拠り所であることは、神ならぬヒトの限界なのだから、基本的には分野を問わない。例えば、宇宙に係る実験科学ですら、拠り所はやはりコトバである。

ハヤブサがイトカワから持ち帰った微粒子になにが含まれているか。たとえあるものが含まれているとしても、サンプルを扱う研究者の側に、その「あるもの」につながるコトバがなければ、みつけれない。(もちろん、今考えられうるかぎりのコトバを、複数の研究者が多角的に持ち寄り、結果「これまでのコトバでは表せないもの」が含まれている、とみつけるこ

とはあるだろう。しかしそれもまた、ヒトのコトバからみれば、「これまでのコトバ」を拠り所としたうえでの、その補集合としてのコトバである。）

社会調査にもどる。

ただ、宇宙に係る実験科学と違って、社会調査の場合は（観察事例ベースだということになるのだが。後述）、コトバを拠り所とする、と言うとき、その拠り所とする仕方が、ややこしいことになっていることに注意しなければならない。

既にふれたように、社会調査の対象は、そのほとんどがヒトの言動と言ってよい。（「ほとんど」と用心するのは、住環境調査での「ダニ」とか、考古学発掘調査での「桃の種」とか、ローカルにみれば、ヒトでない生物やモノを除くわけにもいかないからである。もちろん、「ダニ」はヒトにとってのアレルギー因子、「桃の種」は古代人の鬼道の供物、としてカウントされはするのだが。）

ということは、社会調査とは、ヒトのコトバを拠り所にヒトの言動を対象とする活動、でほぼまちがいない、ことになる。ややこしいのは、この、「ヒトのコトバを拠り所にヒトの言動を対象」である。

今、説明のために、奇妙なヒトの姿を思い浮かべてほしい。

辞書人間である。

辞書人間とは、岩波でも三省堂でも角川でもよいのだが、使用する辞書の枠内でコトバを拠り所にするヒトである。辞書人間について、次の3点

を確認する。

①使用する辞書ごとに、拠り所にするコトバや関連文法規則等に違いがある

②①の違いはあるが、複数の辞書間でほぼ同じものとみなせるコトバや関連文法規則等、いわば異辞書間の積集合（共通部分）が基本的に空ではない

③辞書人間ごとに辞書を使いこなす技術は異なっている

このような辞書人間が社会調査に臨んだとする。すなわち、

使用する辞書の枠内でコトバを拠り所にしヒトの言動を対象とした活動

を行おう、というのである。

①～③の下では、使用する辞書ごとに違いがあるからちょっとバラバラはするだろうが、辞書人間たちの間で概ね共通のコトバが取り交わされ、さしあたり、相応の「ヒトの言動」をとらえ合えそうである。さて。

コトバには、(ほぼ) 同じ対象を表す異なったコトバ、すなわち(類) 同義語があることが知られている。また、その逆に、あるひとつのコトバで異なった対象を表す場合があること、すなわち多義語があることも知られている。

例えば、とある介護事業所で、ある利用者を「ヤマモトサマ」で表すこ

ともあれば、「ウメさん」で表すこともある。そこのベテラン職員が新人に「つないで」と言ったとしよう。ベテラン職員のココロは、ある利用者の健康状態を医療機関に知らせておいて、であり、当然新人が掛け付けドクターに電話して（「つないで」）くれるものだとして期待する。だが、新人は、さっさと来客者用裏門に向かっていく。さっきから犬の鳴き声。「つないで」あるかどうかみに行ったのである。

とある介護事業所の職員どうし、つまり「異辞書間の積集合（共通部分）」が少なくないだろうと考えられる、ごく限られた範囲、においてすら、こういうことがある。（決して実話ではない。「新人は、ウメさんと手をつないだ」といったバージョンも作成可。）

断るまでもなく、社会調査の対象は、とある介護事業所だけではない。つまり、まして「ヒトのコトバを拠り所にヒトの言動を対象」とする社会調査においてをや、である。

図表2をみてほしい。これは、語彙辞典という（類）同義語を整理した辞典で、「つないで」を引いた結果の一部である、「つないで」は、「連絡・所属」に分類されるコトバの一種で、「連絡・所属」に分類されるコトバだけで82も出てくるのだ。

図表 2

連絡・所属	1.1131	1	1	1	連絡
連絡・所属	1.1131	1	1	2	接続
連絡・所属	1.1131	1	1	3	つながり
連絡・所属	1.1131	1	1	4	連なり
連絡・所属	1.1131	1	2	1	連携
連絡・所属	1.1131	1	2	2	連係
連絡・所属	1.1131	1	2	3	コンタクト
連絡・所属	1.1131	1	3	1	連結
連絡・所属	1.1131	1	3	2	併結
連絡・所属	1.1131	1	3	3	直結
連絡・所属	1.1131	1	3	4	結合
連絡・所属	1.1131	1	3	5	結び付き
連絡・所属	1.1131	1	4	1	短絡
連絡・所属	1.1131	1	4	2	ショート[～サーキット]
連絡・所属	1.1131	1	5	1	オンライン
連絡・所属	1.1131	1	5	2	オフライン
連絡・所属	1.1131	1	5	3	リンク
連絡・所属	1.1131	1	6	1	連接
連絡・所属	1.1131	1	6	2	連鎖
連絡・所属	1.1131	1	6	3	食物連鎖
連絡・所属	1.1131	1	7	1	連帯
連絡・所属	1.1131	1	7	2	連座
連絡・所属	1.1131	1	7	3	連累
連絡・所属	1.1131	2	1	1	つなぎ

(『分類語彙表 - 増補改訂版 -』データベース (Version 1.0)、岩波書店、2004)

辞書人間が社会調査に臨めば、とある介護事業所の、とある幼稚園の、とある病院の、とある町工場の、…、…「つないで」がキーワードとしてえられておかしくはない。しかし、同じコトバ「つないで」のココロはみな違うかもしれないし、町工場のと幼稚園のとはごく近いものかもしれない。そういうことで、社会調査に臨んだ辞書人間は迷い悩まなければならない。要すれば、辞書人間が辞書を使いこなすだけで、相当たいへん。ま

さに辞書と首っ引きの辞書人間。

相当たいへん、と書いた。ややこしい、とは書かなかった。だが、「ヒトのコトバを拠り所にヒトの言動を対象」とする社会調査は、ややこしいのだった。たいへん、だけではすまない。

辞書人間が辞書を使いこなす。それだけでたいへん。でも、慣れてくると、手際はよくなる。使い込んだ英和辞典、一繰りで、お目当ての単語の頁を開けられるようになる、みたいに。だが、手際がよくなったのと引き換えに、辞書人間は新しい迷い悩みをみつけてしまう。それが、たいへん→ややこしい、への格上げ分。

迷い悩みの種は、辞書と「対象」とが接するかどうか、というところに生じる。たいへん、までは、いわば「つないで」が辞書のあちこちにあるの迷い悩み。しかし、手際よく辞書を使いこなせるようになると、みつけてしまう。

「対象」をどうするか。

「対象」は主に「ヒトの言動」だった。ヒトがなんと言い、どのように動いたら、「つないで」と認められるのか。目配せしたらか。目配せは1回か、3回か。連絡と言ったらか。「レンラ」まで聞いたらか、「連」と書き始めたらか。

「対象」と辞書とを対応させられるのか

辞書の枠内でコトバを手際よく使いこなせるようになって、この問いへの答えなど出てこない。辞書人間、お手上げである。

同じくお手上げになるのだが、こういう迷い悩み方もある。

目前のヒトの言動。それは、これまで辞書の枠内で「つないで」でよいとしてきたものと似ているのだが、どこか「つないで」では片付けきれないものを醸し出している。そこで、「つないで」とすることにしよう。グッド・アイデア。いや、違う。辞書人間なのに辞書の枠内に収まりきれていない。キリシタン禁令下のキリシタンほど危うくはないだろうが、まずいことには変わりはない。

「抛り所」が不安定になるからだ。「対象」と辞書を対応させようとして、辞書を書き換える辞書人間。それをいつでもどこでもやってよいとなると、第一に、最初の約束「辞書の枠内でコトバを抛り所にする」に抵触するし、第二に、辞書人間から辞書変更人間に変更しなければならなくなる。(『城』を描いたカフカなら、届出先と届出書式はどうするか、と聞くだらう。加えて、そもそも変更すべき辞書、そして変更したと確かめうる辞書がそろって必要なことを訴えるかもしれない。)でも、対象はやはり、「つないで」では片付けきれないものを醸し出していて、「つないで」と言いたくなるものなのだ。辞書人間、お手上げである。

あっちでもこっちでもお手上げになるとわかれば、辞書変更人間には奥の手がある。つまり、ヒトには奥の手がある。

言いたいのだったら、言っちゃまえ

開き直りそのもの。しかし、これがヒトの奥の手であり、ヒトという生き物の限界であることは、既に説明しておいた。その部分を再掲する。

…、…、などなどをコトバにする（しえない）と、ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い「…」、「…」、などなどとみなしうる（えない）のは、昔から多くのヒトたちに、ヒトであればそうするほかない、とわかっていたから、である

ヒトであれば、辞書変更のやり方は、突き詰めれば、

言いたいのだったら、言っちゃまえ

のほかはない。

そうなると、まずややこしいのは、「言いたいのだったら、言っちゃまえ」と言い放ったからと言って、それ（つまり、「つないで」という辞書変更）が「対象」と対応しているかどうかについては、またもやお手上げ（と言うか、のまま）だということである。

加えて、次にややこしいのは、「つないで」という一見「新しい」変更に見えるコトバも、ハヤブサとイトカワのところで少しふれた「「これまでのコトバ」の補集合」なのである。「つないで」を独力で最初から作った

と主張できるヒトなどこの世にいるはずもない。つまり、どんなコトバも個人の発明に帰するわけにはいかない。ひるがえって言えば、コトバとは、そもそも、それほど強固にヒトに貼り付いて在るものであり、ヒトはその時々のコトバのユーザーである外ないのである。前田は、この「暗い事実」に気付いて、長い「沈黙」を余儀なくされた言語学者がいたと指摘している。

「何についてであれ、私たちは「起源」という幻想から免れがたい。この幻想は、言語<sup>ラング</sup>に対してはとりわけ強大で、またもっとも愚かしい。どんな時でも、誰かが創始する言語は言語ではない。言語は、どこまで遡っていかうと「まえの晩」から「ある」。これは人間における最も暗い事実のひとつだと言っている」(前田英樹『沈黙するソーシャル』、講談社学術文庫、2010、83頁)

まえの晩からあるコトバ。

前田がかみくだいてくれた表現を借りて、「序 宙ぶらりんの現実<sup>リアル</sup>」をそろそろ締め括ろう。要すれば、ここまでで次のことが確かめられたことになる。

…、…、などなどを、まえの晩からあるコトバにする(しえない)と、ちゃんとしている、そして／あるいは、胡散臭い「…」、「…」、などなどともみなしうる(えない)のは、昔から多くのヒトたちに、ヒトであ

ればそうするほかない、とわかっていたから、である

ヒトのコトバを拠り所にヒトの言動を対象とする活動、でほぼまちがいない社会調査も当然、この確認事項を底にもつ活動にほかならない。

とすると、

※社会調査の対象は、調査される側のインタビューへの応答なり質問票への回答なり、実際のヒトの言動をそのつど表すコトバを拠り所にして現実<sup>リアル</sup>であり、

※調査する側は、そのほとんどがヒトの言動からなる社会調査の対象についての記述なり分析なりをそのつど表すコトバを拠り所にして現実<sup>リアル</sup>である、

ということになる。

いずれの※にも共通するのは、「ヒトのコトバを拠り所にして現実<sup>リアル</sup>」であること、言い換えればコトバの外はがっしりと頼りにできるものなどにもないということである。この広い世の中、そんなにたよりないことはない。どこかに攀じ登るにも、落ちまいとしがみつくのも、コトバひとつなんて！

あんまりたよりなくって、宙ぶらりんの感じだ。「宙ぶらりんの現実<sup>リアル</sup>」は、この感じを表すコトバ。やっぱり、たよりない。

たよりないついでに、もしそのうえで、なんらかちゃんとしているを考えたいのなら、あくまでこの社会調査のたよりない世界定めの中でのちゃんとしているのことだ、と抑えておく必要があることを付け加えておかなければならない。このあたりをふっ飛ばして、行列計算（Excel でもできるってか）か、アフター・コーディング（なんとかセオリーとか、家元じゃないんだからさ）、量か質か、どちらかスマートにできれば OK なんて、まさか 21 世紀にそんなことおっしゃる方いらっやしませんよね。（大体、量とか質とかワケわかんないし。「ある」と書けば「質」で、「1」と書けば「量」かいな。）

ところで、1 章への糊代として、最後にもう一葉、写真を紹介する。図表 3 である。図表 3 は、日本の写真家木村伊兵衛による「東京のまち」シリーズの一葉「本郷森川町」である。東京都写真美術館の解説ホームページにはこう書いてある。

「警官の視線は地面に落ち、その脇に頭に鉢巻きをした職人風の男が立ち、フェルト帽を被りコートを着た男が警官の方を見つめている。赤ん坊を背負った割烹着の女性が通り、その前で子供たちが遊んでいる」（[http://www.tv-tokyo.co.jp/kyojin/picture/f\\_051001.htm](http://www.tv-tokyo.co.jp/kyojin/picture/f_051001.htm), 2011, Feb）

図表 3



(『アサヒグラフ』、1954)

多彩な人物の絶妙な配置であり、視線交錯の構図である。しかし、この写真は、ホワイトのものとは違って、ヤラセどころか、ライカを駆使したスナップの名人の神業であることがわかっている。なぜか。次章では、この問いを含んで、社会調査における「理由」について扱う。